

金魚に指かませてにやける父

長谷川柊香

父の父じゃない顔というのは、子にとって何か強烈なインパクトを持って降りかかる。当たり前のように父にも幼少期は存在するが、子にとってそれが浮き彫りになる瞬間には恐怖にも似たようなものを感じる。この句にはその生々しさが伝わってくる。絵面としての可愛さに自虐的な行為ににやける父というアンバランスな加減が良い。

遠くで雷

自転車をこぐ足が

何かの瞬間で

つりそうな恐怖

桜咲

遠雷は夏の季語として古くから詩歌に使われてきた言葉である。この言葉には何か不穏な予感がある。黒い雨雲がこちらに迫ってくる中で懸命に自転車を漕ぐ少女の姿が目についた。

この詩の面白さは、遠雷の恐怖より足がつりそうなことに恐怖を抱いている肉体的なりアリティにある。しかも、それがさらっと表現されているから良い。実体験に基づく迫力だなと思わせてくれる。

また、この詩が【遠くで雷自転車をこぐ足がつりそうな恐怖】であれば佳作には残らなかっただろう。【何かの瞬間で】というのがポイントで、既に差し迫った状況のなか遠雷以上のひりついた瞬間が来ることを想像させるからだろう。

中山